
Cross

竜崎太郎

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r o s s

【Nコード】

N 3 2 7 7 G

【作者名】

竜崎太郎

【あらすじ】

人々が争い合う世界で、様々な人間達の運命が交差する。

1

今ではない時、ここではない世界。

ある大陸では、荒野が広がっていた。

永い時をかけ、人々は文明を築いていった。

それは人の手・知恵・魔法などによるものだった。

各地で様々な文明を作っていた人々は、やがて結束し、国を作った。

更に時を経て、荒野は少しずつ変わっていった。

荒野・草原・町・・・

そしてそこにいくつかの国と文明が入り混じる、広い大陸。人々はそこで、静かに暮らしていた。

しかし人間たちの中には、争いを好む者もいた。

この大陸を制覇し、統一しようとする者もいた。

また破壊の限りを尽くし、再び荒野を広げようとする者も・・・
そういった者達の為に、争いは起こった。

始めは小さな争いだった。

しかし時が経つにつれ、それは大きくなっていった。

今や大陸には、国々が戦い、常にどこかで誰かが何かを奪い合い、血を流すような時代が訪れた。

物語は、この大陸から始まる。

戦乱の世を感じさせないような、静かな夜。
丘の上に、背中に交差した二本の剣を差した男が立っている。
男はじつと遠くを見つめて、呟いた。
「・・・これから更に、世は荒れるな」
赤茶の長髪と赤いマントを風になびかせ、暗い空に映る彼の姿は炎のようだった。

――朝。

草原を歩く、一人の男。

黒い服、黒い髪、腰には銀色の剣。

細身の長身・端正で童顔なその少年は、ジンといった。

「・・・フウ」

ジンは黙って、ゆっくりと岩に腰かけた。

「・・・。」

そして空を見上げて、その青さを感じていた。

彼は温厚な性格だった。

今のような人々が争い合う世を、早く終わらせたいと願っていた。
だがこの大きな世界の中の、小さな自分に何ができるだろう。

彼は唯一得意とする剣技を、世に役立てたいと感じた。

そして今、彼は旅をしている。

己の剣技を、一人でも多くの人の力とする為に。

「・・・。」

しばらく経った後、彼はまた歩き始めた。

次の町までは、あと少しだ。

「おい」

そこに、ガラの悪い男達が三、四人。

「俺達がどんな連中かは、見ればわかるよな？」

憎らしい目つきで、ジンに刃物をつきつける男達。

この世界では珍しくも何ともない、盗賊だ。

「……。」

「何とか言いな」

ジンを脅す盗賊に向かって、周りの味方達は野次を飛ばす。

「へへへッ、震えて声も出ねえんだろ！」

「安心しなよ、俺達そんな悪い盗賊じゃないし、幸か不幸かお前は男だ！」

「金さえ出せば、他に何アンにもしやしねえからよお！」

ジンに刃物突き付けたまま、盗賊は言う。

「……そういう事だ。さ、金目のモンを出してもらおうか」
「……。」

ジンは素早く、後ろに大きく一步下がり——剣を抜いた。

普通、剣は背中か左腰に差す。

しかしジンは、抜きやすいからと背中の下の方に剣を差していた。

それは本人がそう判断しているだけあって、大正解だった。

四人に囲まれかかったこの状況で、ジンは一瞬にして一步下がって剣を抜き、戦闘態勢に入った。

それは彼の抜群のセンスと、度胸もあつての事だが。

そして彼の眼は、先程までの温厚な眼差しとは違い……鋭くなっていた。

「ほう……おとなしくしてりや調子に乗りやがって」

「全然おとなしくしてないだろう」

初めて口を開いたジンは、冷たく的確に言い放った。

「てめっ」

盗賊達は、それぞれ刀や斧などの武器を構える。

「……。」

ジンは素早く駆け出し、まず一人斬った。

「ぎゃあーっ！」

「なっ何だ!？」

そのスピードに、盗賊達は驚き動けなかった。

「……。」

ジンは無言のまま、流れるように二人目を斬る。

「ぐああーっ！」

「嘘だろう……。」

そして素早く回転し、三人目。

「うつ……うわあーっ！」

四人目は、走って逃げて行った。

ジンはもう、追いはしなかった。

その眼は温厚な眼差しに戻っていた。

「クツ……畜生」

数秒の内にはにジンにやられた三人の盗賊は、皆肩を斬られていた。

「……。」

ジンは思った。

各地で戦争が起こり、金も物も、食糧も職も不足気味な世界。

自分も一歩間違えば、盗賊になっていたかもしれない。

「……。」

ジンは黙って鞆から薬草を取り出し、そつと盗賊達の傍に置いた。

「てめえ……。」

「……。」

そしてそのまま、次の町へと歩いて行った。

アイタウン――

大陸の南に位置し、それなりに繁栄している町。

ジンはここで、休んでいく事にした。

彼は宿を取ると、町に出て薬草を買った。

町では、人々の会話が聞こえて来る。

「こんな世の中、儲かってるのは武器屋と防具屋くらいだろう」

「いやあこのへんにやあ軍が無いから良いけどよ、北の方では武器やら食い物やら、何でも国の軍人に根こそぎ奪われるそうだし」

「盗賊が多いとはいえ、わしらはまだ平和な地域で良かったのー」

ジンは黙って、武器屋の前を通り過ぎた。

「兄ちゃん兄ちゃん」

武器屋の親爺らしき男が、ジンに話しかける。

「兄ちゃんの剣、ちよいと小さくないか？良い剣が揃ってるんだがなあ」

「・・・。」

「ちよつと見るだけ、見てかないか？」

「いや、小さい方が扱いやすい」

「だけでもそんな小さな剣じゃ、心もとないだろう！」

「・・・いざという時使いこなせない剣の方が、俺は怖い」

「あ、ああ、そうかい・・・」

ジンの無表情な顔、あまり口を開かず冷たい印象を与える話し方に、親爺は諦めた。

確かにジンの剣は、彼の体格からすれば小さかった。

幼い頃から使っている、少年用の剣だからだ。

ジンはずっと、この剣を大事に扱ってきた。

今日もそれを一時たりとも肌身離さず・・・彼は酒場に入って行った。

「いらつしゃい！何にする」

「・・・紅茶」

「はいよー！」

マスターはそつと、ジンに紅茶を出した。

そこに、後ろから軽装の男が近付いて来た。

「よお。隣、いいかい？」

「・・・。」

ジンは黙って頷いた。

隣に座った少年は、ジンよりも年下のようだった。

ジンは童顔なので、同年のように見えたが。

とにかく、周りの数人からは子供二人が酒場に来て何をしているんだ、という目で見られた。

残りの数人は世を嘆き、こちらの事など気にせず昼間から酒を飲んでいる。

「畜生、北に住む息子が徴兵されちまったあ！」

「うちの母ちゃんも食糧難のせいで死にそうだ・・・」
暗い声が聞こえる。

「おじさん、俺ミルクね！」

隣に座った少年は、茶色い長髪、赤い服、青いジーンズ。

そして武器なのか何なのか、長い棒を横に置いている。

彼はミルクを飲みながら、ジンに問いかけた。

「あんたの名前は？」

「・・・ジン」

「俺はケビンだ、よろしくな！」

ケビンは次々に話しかけてきて、あまり話すのが得意ではないジンは、少し困った。

「酒場なのに、酒飲まないのか？」

「あまり飲めないんだ」

「へーっ、俺と同じだ！」

しかし同年代の者と話す機会は、あまり無かった。

ケビンとの会話は、結構楽しいと感じていた。

八割方、ケビンが話しているように見える光景ではあったが。

「そのネックレスは？」

「・・・！」

ジンは胸に、銀色の十字を下げていた。

「・・・。」

「あ、話したくなけりゃいーよ」

「・・・。」

ジンは何か、悲しそうな目をした。

しかし場が暗くなる前に、ケ빈は話し続けた。

「酒が飲めないのに、何でこんなところに？紅茶はどこでも飲めるぜ」

「何か面白い話が聞けるかもしれないから」

「おーっ！またまた俺と同じじゃん！」

ケ빈は、語った。

「俺、今の世の中を変えたいと思ってるんだ。棒術は昔から習ってたけど、あんまり自信は無い。頭の方には、もっと自信は無い！」

「・・・。」

ジンは少し微笑んで、大きな目でケ빈を見つめた。

「しかしあんた鼻高いよな！。肌も白いし、美形だ。羨ましいぜー」

ジンはしばらく黙って聞いて、言った。

「・・・続きは？」

「ああゝあ、そうだ！それで、何も持っていないし何もできない俺だけだよ。こんな俺でも、世の中の為に何かできると思うんだ」
ジンは何か楽しそうに、聴き続けた。

「それで、その何か行動できるチャンスって、待ってても来ないだろ。それで、冒険の情報収集の基本といったら酒場だろ？だからこ
うして町まで出て来たんだよ」

「じゃあ、旅を？」

「いや、俺はこの町の近くの村の住人だよ。まあよくこの町にはこ
うして来てるんだ。あんたは旅人？」

「ああ」

「そつかー。俺の棒術の師匠が元旅人でさ、いろいろ北の方の話を聞いたな。まあその頃は今よりは平和だったみたいだけどなー」

「・・・。」

「でも師匠は故郷に帰って、そのまま徴兵されたく・・・今は何をしてるんだか」

「・・・。」

「そうだ、ジンの旅の話も聞かせてくれよー」

「特に話すような事はないよ。こうして町に立ち寄って、また別の所に行くだけ」

「確かにジンの性格じゃ、他人と関わる事もあんまり無さそうだしなー！」

「・・・。」

「ジンは無言で、少し微笑んだ。

「いやいや褒めたつもりは無いんだけど！そんで金はどうしてるんだ？」

「賞金首や盗賊なんかを倒して、稼いでるかな・・・たまにだけ」

「じゃああんた悪い奴のハンターか！カッコイーな！強くないとできない事だし」

「・・・ケ빈は何を？」

「俺は村でできた作物を、この町や他のトコに売ってるんだ。明日には帰らないと・・・そうだ、明日一緒に村に来ないか？」

「良いのか？」

「もちろん！」

「なら」

こうして、ジンは村へ赴く事となった。

翌日――

「朝だぞ！」

宿と部屋を教えると、勝手に入って勝手に泊まったケ빈。

「・・・まだ早」

「早くない！」

しかも明け方に、ジンは起こされた。

「農業やるうと思ったら、早起きは基本だぜ！」

「・・・。」

ジンは農家を目指してはいなかったが、とりあえず起きた。

「じゃ、行くか！」

空は、明るくなったばかりだった。

町で買ったパンを食べながら、山の上の村を目指す二人。

「・・・。」

ジンは自分から話しかける事は、誰に対してもあまり無かった。

「もつと喋ってくれても良いんだぜー」

ケ빈は見た目通り、軽い男だった。

そしてその軽い口調で、世界を救いたいなどと言っている。

だがジンにはわかった。

それはおそらく、本気で言っているのだろう。

「・・・村の名前は？」

「ソタ村っていうんだ。山の上にあるから、景色は結構綺麗なんだけ。まあ何も無いけどなー」

山を歩いていると、焦げ茶色の野良犬が寄って来た。

ジンは座って、少し犬と戯れた。

「・・・。」

そして微笑みながら、食べかけのパンを与えた。

「動物、好きなのか？」

ケ빈の問いに、ジンは黙って頷いた。

「へーっ！子供と動物は嫌いそうなイメージだけどなっ」

「子供は・・・普通かな」

「村には動物たくさんいるぜー！牛とか鶏とか豚とか・・・あと牛とか！」

「・・・。」

二人は気楽に、山を登っていった。

そして、村に着いた。

「ただいまー！・・・あれ」

雰囲気が、何かおかしい。

ジンの表情は険しくなっていた。

ガラの悪そうな男が、こちらに近付く。

「！」

そして、奥にいる男を呼んだ。

「副頭領！」

「ああん？」

「こいつですよ！俺らを斬りやがった奴！」

「ほう、こいつが！」

ジンは思い出した。

この男、アイタウンに行く前の道で現れた盗賊の、逃がした男だ。

「知り合い、か・・・？」

ケ빈はジンに訪ねた。

「・・・悪い方の」

ジンは答えて、副頭領と呼ばれた男を見た。

「お前、こいつらをやってくれたんだってなあ・・・俺の大事な部下をよ」

肩に鎌を乗せ、こちらを睨む。

中々強そうだ。

ケ빈もそれは感じていて、いつもの軽い振る舞いではなくなっていた。

「見ての通り、この村は今俺達に支配されてるんだ」
副頭領は、言った。

「何だと!？」

ケ빈は怒った。

「村人に、何かしてねーだろーな!？」

「フン、いきがるな小僧。村人共には手を出してない・・・まあここ数日、俺達の為にせっせと働いてもらってはいるがな」

「デメー!」

更に怒り、身を乗り出すケ빈を、ジンは黙って左手で止める。

「何だよ!」

「こいつ、結構強い」

副頭領は、笑った。

「フン、さすがに冷静だな」

「・・・村を支配してるのは何人だ？」

ジンは冷静に、聞いた。

「ざつと30人はいる。勝てないのはわかったか？」

「・・・」

「おとなしく縛られな・・・おい!」

副頭領の命令で、盗賊達が縄を持つ。

「おいおいジン!このまま黙って縛られるのかよ!」

「・・・」

「黙ってる小僧!」

「グッ」

盗賊はケ빈を蹴飛ばし、縛り上げる。

「さあお前もだ・・・あん時やよくもやりやがったな!」

盗賊はジンも蹴飛ばし、縛る。

「・・・」

ジンの鋭い目つきに、少し怖気づいた盗賊は、そのまま静かに縛った。

副頭領は言った。

「そいつはお頭の所に連れて行こう。そっちの小僧は、俺が見とい

てやる。とりあえず、こいつら離しといた方が良い」

「へいつ」

副頭領の、的確な判断だった。

ジンはケビンの方を、チラリと見た。

ケビンは困惑した表情で、おとなしくしている。

ジンはケビンの目を、じっと見た。

ケビンには、ジンが「チャンスを待つんだ」と言っているように感じられた。

「お頭！こいつです、俺らアの仲間に手エ出しやがったのは！」

「ほあゝう、お前かア！」

盗賊の頭領らしき男は、村長の家で椅子に腰掛けていた。

その身はとも大柄で、鉄仮面を被り、大斧を持っている。

「俺様の可愛い部下に手を出してくれたんだな、ええっ!？」

「・・・。」

ジンは黙っていた。

「ふざけた野郎だ！すました顔しやがって。ム力つくぜ」

「・・・。」

「俺様の名はゾネア！盗賊団の頭として、お前にオトシマエをつけさせてもらう！おい、縄をほどきな」

「・・・！」

ジンは驚いた。

「ちょうど退屈してた所よ！部下の仇、俺様自らが討ってやるぜ！」

「おお！」

「さすが頭だ！」

「・・・。」

ジンは少し、目の前の男を見直した。

「さあ、ここでおとなしくしてな」

副頭領に連行され、倉庫に入れられたケビン。

「・・・ちくしょう！」

「おお・・・ケビンか？」

「村長！父ちゃん、母ちゃん！」

「おおケビン！」

「捕まってしまったのね・・・でも無事で良かった・・・」

ケビン達は、再会を喜んだ。

「みんなこそ無事で良かったぜ！」

「こんな村を襲っても大して収穫は無かるうに、のう・・・」

「世が飢えているんだ。今は耐えよう。命までは取られんよ」

村長とケビンの父はそう語り、母は黙っていた。

「俺に力があれば・・・」

ケビンは、ただ悔しい思いに耐えていた。

「・・・行くぜ」

「・・・。」

ゾネアとジンの決闘が、始まった。

「うおおーっ！」

大斧を振り上げ、襲い掛かるゾネア。

素早く左に避けると同時に、右手で剣を抜くジン。

そのまま流れるように、水平に斬りつける。

ゾネアもまた素早く手を引き、目の前で刃を縦にする。

刃と刃が、十字にぶつかった。

このままでは力の強いゾネアの方が、有利な状況になる。

ジンは素早く身を退き、剣先を向け・・・突く。

「がああーっ！」

ゾネアは大声と共に太い腕を振り、左の拳をジンの顔面に放った。

ジンはとっさに反応し、突いた剣と共に、大きく身を退いた。

「（攻撃を攻撃で防ぐとは・・・面白い）」

ジンは恐怖する所か、楽しんでいた。

強敵との戦いは・・・久々だ。

「やるなあ、小僧。良い退屈しのぎよ」

ゾネアもまた、楽しんでいた。

「何か・・・チャンスは無いかな」

ケ빈は、ただひたすら倉庫の外の様子をうかがっていた。

村長は老人、父も母もただの農民で、力は無い。

「俺が何とかしたい・・・が」

「や、やめてくれケ빈。俺達はお前を失いたくない」

父はそう言った。

「そうよケ빈。あんたは大事な一人息子なのよ・・・盗賊はいずれ去るわ」

「そうとも・・・限らないだろ」

ケ빈はただ、チャンスを待った。

そして、時は来た。

「ワンワン！」

犬の声。

「何だあ？」

盗賊達は、多少気にした。

「ワンワン！ワンワン！」

犬の声は、鳴き止まなかった。

「何だようるせえな！おい、見て来い！」

「へい」

副頭領は、倉庫を見張る盗賊を一人、声のする方へやった。

「（・・・今だ！）」

ケ빈は素早く、縄を抜けた。

縛られる時、抜けやすいようにしておいたのだ。

「ケビン！？」

「待っててくれ！」

そして倉庫にあったほうきの柄を取り棒として持ち、戸を破り、副頭領に襲い掛かる。

「何だ！？」

「うおおーっ！」

油断した副頭領を蹴飛ばし、ほうきの柄で一撃を加える。

「ぐはっ！」

「俺だつて・・・できる！」

「・・・良い度胸だ、小僧！」

そしてケビンと、副頭領の戦いも始まった。

「おとなしくしていれば死なずに済んだものを！」

副頭領は鎌を振り上げ、迫って来る。

ケビンは実戦経験は無い。

恐怖心に、何とか勝とうと・・・ただ真っ直ぐに、敵の目を見た。

そして、読めた。

副頭領の目は、下を向いている。

次の攻撃は、足！

ケビンは素早く飛び上がり、鎌を避けた。

「何っ！？」

「うおおっ！」

そして空中でビリヤードのような構えを取り、力を込めて、副頭領の目に一撃。

「ぎゃあああーっ！」

そのまま回転して、横顔にもう一撃。

「ぐあああっ！」

倒れた副頭領の頭に、とどめの一撃。

副頭領は気を失った。

「や、やった・・・」

「ワンワン！」

村にはまだ、犬の声が響いていた。

盗賊達は、声の主を探している。

ケ빈は、ジンの元へと走った。

「終わりにしてやるわ！貴様の命を！」

ゾネアはがむしゃらに大斧を振り回しながら、突進してきた。

ジンは斧をよく見て、一撃ずつ丁寧に避けていった。

しかしここは屋内、避けるには限界があった。

ジンは後ろ向きで、走った。

彼は前を向いた状態で、後ろに走る事ができた。

幸い、この時村の盗賊はほとんど村人の見張りか、犬探しをしていた。

「（屋外に出れば、こっちのものだ）」

ジンは広いスペースを使って、存分に避け、走り回った。

「うおおっ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ゾネアには、疲れが見え始めた。

ジンにはまだ余裕がある。

「（今だ！）」

ジンは素早く駆け寄り、ゾネアに一撃を与えた。

「ぐぬっ！」

ゾネアには確かに一撃入り、彼は声を上げたが・・・倒れない。

「まだまだぁ！」

「お頭ぁ！」

村長の家にいた盗賊が、ジンにナイフを投げようとする。

「やめんか！」

ゾネアはそれを制止した。

「・・・」

ジンは珍しく、自ら口を開いた。

「・・・あんた誇り高いな。その性格と強さ、軍人か何かだったんじゃないのか」

「!・・・ふん、勘の良い小僧よ!俺様は確かに軍人だったが、国が戦争に敗れ職を失ったんだ」

「それで盗賊になるとは、勿体無いな」

「黙れ!俺様は望んでいた、規律の無い自由な生活を手に入れたんだ!」

ゾネアは垂直に大斧を振り上げ、空気が裂けるように激しく振った。その衝撃波で、ジンの髪と頬は切れた。

だがジンは、確かにそれを見切り、一刹那前に避けていた。そして素早く駆け寄り、もう一撃与えた。

「俺様の・・・負け、か・・・」

ゾネアは倒れた。

その瞬間を、今来たケビンは見ていた。

「すげーなジン!」

「ワンワン!」

犬の声は、まだ止んでいなかった。

「犬一匹捕まえてないみたいだぜ、あいつら」

「・・・残りの盗賊も倒そう」

二人は二手に分かれ、盗賊を倒していった。

ジンは走りながら、流れるように斬っていく。

「ぎゃあ!」

「うわっ!」

残りの盗賊など、ジンの足元にも及ばない者ばかりだった。

やはり急所は外していた。

走りながらもその余裕を見せる彼の剣技は、かなりのものだろう。

ケビンもまた、先の戦いで自信をつけ、盗賊相手には敵無しかった。

「おらおらーっ！みんな、助けに来たぜ！」

「おお、ケビン！」

そして畑で村人たちを救出した。

「ワンワン！」

「お前は・・・」

その頃ジンは、ある顔と再会していた。

応急処置されたゾネアと副頭領、そして盗賊達はお縄についた。ゾネアは諦めたように、あぐらをかいて言った。

「・・・チツ！好きにしろ」

ケビンは棒で、ゾネアの頭を強くつついた。

「おとなしくしろ！ったく」

ジンは言った。

「・・・してるよ」

「どうする、村長、みんな？」

「・・・わしらは誰も傷一つつけられなかった。釈放しよう」

「ええーっ!？」

村長の意見に、皆賛成だった。

「・・・。」

ジンは笑った。

この世の中、やはり良い人間も沢山いる。

盗賊達は村を支配してはいたが、誰も殺したり傷付けたりはしていなかった。

村人たちは、おそらく誰も盗賊に厳しい罰を与えようなどとは思っていなかった。

ジンは笑った。

いつもよりは、少し大きく。

「・・・へっ！いくぞおめえら」

「へい！」

ゾネアと副頭領、盗賊達は去って行く。

「・・・残りたい奴がいたら、残れ」

ゾネアはそう言ったが、全ての盗賊が彼に付いて行った。

「・・・勝手にしな！」

そして盗賊団は姿を消し、村には元の平和で静かな時が訪れた。

「本当に良かったのか？」

「ああ、これでいいんじゃないよ。彼らももう、何もすまい」

「そうかねー？」

ケビンだけは、不服そうだった。

「しかし・・・」

そして、ジンの足元にいる犬を見る。

「お前が助けてくれてたんだな！」

「ワンワン！」

それは山に登る途中に会った、焦げ茶色の野良犬だった。

「可愛い奴だぜー！やっぱ餌をあげたから、恩返ししたんだな！」

「・・・ケビン、あげたかな？」

「クウーン」

犬は、ジンによくなついていた。

「・・・。」

いつもと違い、今沈黙していたのはケビンの方だった。

そして長い一日が過ぎ、ケビンの家で休む二人と一匹。

翌日――

「・・・世話になりました」

ジンはまた剣を持ち、旅に出る。

「本当にありがとうございました」

「気を付けてくださいね」

「・・・。」

ジンはニコリと笑って、村を後にする。

足元には、焦げ茶色の犬もいた。

見送りに来たケ빈は言った。

「ジン、そいつも連れてくのか？」

「そのつもりは無いんだけど・・・離れないんだ」

「クウーン」

「じゃー名前つけてやれよ」

「・・・ランディ」

「早っ。・・・良かったなー、ランディ！」

「ワン！」

言葉がわかるかのように、ランディは吠えた。

「じゃ、また・・・」

ジンは遂に、村を出る。

「んじゃ、そゆ事で！」

ケ빈もまた、村を出る。

「・・・え？」

ジンはケ빈の方を見た。

「これからもよろしくな、ジン！」

「!？」

「俺、お前と一緒に行きたいんだ。父ちゃんと母ちゃんにも、もう話したしな」

ジンは父と母の方を見た。

「・・・言っても聞かない子なんだ、昔から」

「どうかよろしくお願いします」

村長も、笑っていた。

「ほっほっほ、昔から孫同様に見てきたが・・・調子者ではあるが、足手まといになる事も無いと思います」

「・・・。」

ジンは参ったな、という表情をしながらも、嬉しかった。

「・・・よろしく」

「おう！」

「ワン！」

そして一人旅をしてきたジンに、一人と一匹の仲間ができた。

「元気でなー！」

「おう！みんなもなー！」

村を離れずつと歩いてても、ケビンと村人達は手を振り続けた。
ジンはそれを、羨ましそうに見ていた。

ランディは、嬉しそうにその後を付いて歩く。

二人と一匹の旅が始まる。

#2

大陸の、西。

ここでもまた、ある人間達の運命の糸が絡み合おうとしていた。

農村が連なる国、エターニア。

ここには十数年前に盗賊が現れ、そのまま支配され続けている。
遙か南のソタ村も、「彼ら」が現れなければそうなっていたかもしれない。

この国の支配者の名は、ゴウ。

側近にシンという名の剣豪を持ち、今やその部下も数倍に膨れ上がっていた。

彼は農民達に食料を貢がせ、金を貢がせ、酒を貢がせ、女を貢がせ、
暴虐の限りを尽くしていた。

エターニアの農村の一つ、その畑で、今日も働く若者がいた。

「・・・はあ」

溜め息が漏れるのも、無理は無かった。

働けど働けど、できた作物の大半は奪われる。

父も母も痩せ細り、自身も決して健康とはいえない状態だった。

「（このままじゃ、ダメだ・・・）」

若者の名は、クリフといった。

疲れ切った薄茶の服装は、まさに農民といった感じだった。

髪も痛み切った茶色だったが、その瞳だけは何か特別なものを感じさせた。

「・・・帰ろう」

空も暗くなってきたので、彼はゆっくりと家路についた。

その頃、エターニアの別の農村では、ある別の若者が決心をしていた。

「・・・このままじゃ、ダメだ！」

この若者の名はゾーンといい、短く逆立った黒い髪に水色の格好。その瞳はクリフと同じく特別なものを感じさせ、熱い志を持っていた。

「変わるなら今だ！行動するのは早い方が良い！チャンスばっか待ってても、ダメなんだよ！」

周りに向かってわめく彼に、他の農夫は諭した。

「これこれゾーン、そんな事を大きな声で言うもんじゃない」

この農夫はゾーンの隣の家に住み、幼い頃に両親を失ったゾーンを昔から大事にしてきた。

「俺の両親は、あいつらのせいだ！」

昔からゴウを恨み、栄養不足で倒れた両親の仇を討とうとしていた。その度にこの農夫・デンスケが抑えていた。

「今は待つんじゃ・・・」と。

エターニアの端のこの村では、ゴウの部下も中央に比べかなり少なかった。

クリフの住む地域では、こんな事を大声で言っていればすぐに捕まる。

「今こそ皆で立ち上がって、ゴウを倒すんだ！」

今日のゾーンは、中々黙らなかつた。

「やれやれ・・・『今こそ』というが、疲弊して衰退しきつた『今の』わしらに、何ができよう」

「・・・。」

「ゴウには息子もなく、後継者もおるまい。奴が死ねばこの国には

きつとまた平和が」

「そんなん待つてられっか！まずは武器だ！」

「ふむ・・・やれやれ」

ただゾーンも、運動神経・喧嘩の腕はかなりのものだが、武器無しで反乱しようと思うほど馬鹿ではなかった。

とにかくその日は、一名を除いて静かに過ぎていった。

翌日――

ゴウの兵達が、ゾーンの住む地域に作物を収めさせにやって来た。

「そろそろ来る頃だと、思ってたんだよ」

「ゾーン・・・？」

「デンスケ、俺は昨日ガツンと飯を食った。もう作物を収める必要は無いからな」

「ゾーン、まさか・・・」

「そしてしっかり飯食って力つけなきゃ、あいつらには勝てないからなッ！」

「ゾーン、落ち着くんじゃ！」

ゾーンは走り始め、兵達の一人に体当たりをした。

「貴様、何のつもりだ！」

兵は十数人。

皆が槍を持っている。

ゾーンは今倒した兵から槍を奪い取り、構えた。

「俺の名はゾーン！この国の英雄になる男だぜ！」

「・・・！」

デンスケはただ、それを見ていた。

「もう遅い・・・しかし」

死なないでくれゾーン、と。

「・・・やるぞ」

兵達はあるという間に、ゾーンを囲んでしまった。

「結構いやがるな」

ゾーンはやはり多少、焦った。

一対十数。

ここが国の中央なら、まず間違いなくやられていた。

「でもここは幸い、国の端！このチャンス、今こそ有効に使わせてもらうぜ！」

ゾーンはまず、槍をなるべく長く持ち、そのまま回転した。

「ぐわっ」

油断した兵達は、一斉に倒れた。

「・・・あれ？案外いける！？」

もう何年も反乱など起きていない。

兵達も、かなり腕がなまっていた。

「よっしゃ！」

ゾーンは走り、狭い所に駆け込んだ。

ここなら相手の人数が多くても、一対数人ずつで戦える。

「待て小僧！」

「オラアッ！」

ゾーンは見事に、兵達を倒していく。

小さい頃よく、農具を使って友達と遊んだっけ。

ちなみにその友達は兵になったり、飢えて死んだり、国から脱走したりで・・・誰も残っちゃいないが。

とにかくあの頃は何もわからず、憎き「兵隊ごっこ」なんてやってたな。

「でもよ・・・へへ、感謝するぜ！その経験に！」

元来運動神経の抜群に良いゾーンは、すぐに槍を使えた。

ゾーンが全ての兵を傷一つ負わず倒すのに、数分も要しなかった。

「俺・・・才能あるんだな！やっぱ飯食ったのも効いたな！よう、見てたかいデンスケよ」

「お前・・・何という事を！無事で済んだのは良かったが、これか

ら兵がお前を追うぞ！」

「大丈夫だよ、俺の腕を見ただろ」

「ここに兵は数十しかいなかったが、国の中央には何百という兵がいるんじゃない！」

「そうだな・・・デンスケ、もう俺ら会えないかもしれない。でもがんばるからよ、あんたもがんばれよ！」

「ゾーン！」

「じゃあな！今までありがとよ！」

ゾーンは槍を持ち、走って行った。

ゴウ達のいる、国の中央へと・・・

数日後――

「クリフや・・・」

母は、畑に出るクリフを呼んだ。

「どうしたんだい、母さん」

クリフは母の横たわるベッドへ向かった。

「先日、この国で久々に反乱が起こったそうじゃ」

「へえ・・・」

「あたしやお前がいてくれれば何も要らない、どうかお前は反乱者にも兵達にも目をつけられんよう、気を付けとくれ・・・」

「・・・ああ、わかったよ母さん」

「本当に、気を付けてな」

奥で椅子に座る父も、クリフを見送った。

「じゃあ、行ってきます」

クリフは今日も、畑仕事に出かける。

「（反乱者、か・・・）」

そしてこの直後、クリフの運命は大きく変わる。
やはりその、「反乱者」によって。

「おい貴様」

外に出ると、兵に話しかけられた。

「はい」

「反乱者・ゾーンは、近日中にこの中央地帯に侵入するとの事。何か情報は無いか？」

「いえ、私は今日初めてその話を聞いたので」

「そうか。怪しい奴を見かけたら、すぐに呼ぶように」

「はい」

クリフはゆつくりと歩き始める。

「（このまま毎日ゴウの為に働いていても、母も父も痩せてゆくばかり・・・）」

その眼差しは、真剣だった。

「（父母に心配はかけたくない・・・が）」

クリフは、迷っていた。

「おい貴様」

しばらく歩くと、槍を持った男がクリフに話しかけた。

「はい」

そしてまたクリフは、それに答えた。

兵士にしては、随分と軽装だ。

それに逃げ回っているかのように、疲れた感と汚れた感がある。

まさか・・・

「俺が反乱分子だよ。どうする？」

「え！？」

クリフは驚いた。

この人は、一体何がしたいんだ・・・？

見た所、「反乱分子」はクリフよりも少し年下だった。

そしてその眼は、とても熱かった。

「・・・。」

「大声を出して、兵を呼ばないのか？」

「・・・何が目的なんですか？」

「久々に若い奴を見たからな、あんたを試そうと思ってね」

「？」

「あんた、このまま一生ゴウを肥やす為だけに畑を耕して過ごすのか？」

「！」

「俺と一緒に・・・国をぶっ壊して、作り直さねえか！」
「なっ」

「俺はたった一人でここまで来た！もう何十という兵を倒して」

「・・・。」

「俺とお前、そしてもっと名前を集めれば、できるさ！」

「・・・。」

そこに、先程の兵が来る。

「おい貴様、見慣れん顔だな」

ゾーンは素早く槍を振り上げ、兵を倒す。

「ぐはっ・・・出あえーっ！」

数秒の内に、何十という兵がやって来た。

「さすが国の中央だな・・・武器ならそこに、あるぜ」

ゾーンは槍を構えた。

そして、クリフに倒した兵の槍を拾わせようと促した。

「・・・。」

クリフは、決心した。

「・・・重っ」

クリフは槍を取ったのだ。

「よっしゃ！」

ゾーンの闘志は激しく燃え上がった！

しかしクリフの身体能力は元々高くない。

それにしばらく十分な栄養も撮れていなく、戦うのは厳しかった。

「反乱者は一人と聞いていたが・・・」

「奴も刃向っているのだ、殺せ」

兵達は、クリフも標的とした。

「うおおーっ、行くぜ！」

ゾーンは素早く駆け出し、袈裟斬りを放った。

「むっ！？」

兵はその予想外の強さに怖気づく。

「囲め！」

兵達は、二人を囲み始める。

「（いけない！）」

クリフはとっさに、端の兵に向かって槍を投げた。

「うおっ！？」

端の兵は倒れ、他の兵達の動きも鈍った。

「狭い所に入って戦うぞ！」

「近くには無い・・・高い所に行こう！」

クリフにはもう武器は無かったが、ゾーンを信じ誘導した。

少し低めで、登りやすい木。

二人は上手くそこに登り、兵達を迎えた。

「降りて来い！」

「バーカ、誰が降りるか！」

「この国の兵って、案外弱いんだな」

クリフは安心したようにそう言った。

「俺達がいままで何もできねえと思って、なめてやがんだよ！でも俺達だって油断してると、やられるぜ！」

「あっ、ああ！」

二人はとにかく、戦った。

クリフは蹴り、ゾーンは突いた。

しかし両者、疲れきっていた。

特にゾーンはこの数日走り続け、大して物も食べずにここまで来た。

二人は遂に足を滑らせ、落下・・・残った十数人の兵に、囲まれた。

「クソッ！」

「すまない・・・」

「おつオメーのせいじゃねえよ！」

死を覚悟する二人、囲む兵達。

「手こずらせおつて！」

「覚悟しろ反乱者共・・・！」

そこに、一人の男が現れた。

男は兵達を後ろから斬り倒していく。

「ぐわあっ！」

「誰だっ!？」

すかさずクリフとゾーンも立ち上がり、再び構える。

謎の剣士、クリフ、ゾーン・・・

二刀流の剣士には余裕がありそうだったが、クリフとゾーンは限界だった。

しかし三人は、何とか兵達を倒した。

「助かったぜ！」

「あ、ありがとうございます」

「・・・。」

赤茶の長髪、赤いマントのその男は、マントから剣を出し、クリフに与えた。

「え？」

「・・・君に槍は向いてない、これを」

「ど、どうも」

「・・・この刃、どう扱うかも君次第。・・・そちらの、槍使いの君の力も同じ」

「は、はい」

「何だ何だ？」

「・・・。」

マントの男は、それだけ行つて立ち去つて行つた。

「何だかわからねえけど、助かったな。とりあえず」

「ああ・・・。」

とにかく二人は、クリフの家で休む事にした。

母も父も驚き、倒れそうになった。

「まさかクリフまで反乱者になってしまうなんて・・・」

「と、とにかく今日はゆつくり休みなさい。いつ兵が来るかはわからないが、我々が何とかしよう」

「ごめんよ父さん、母さん・・・」

「お世話になるぜ！」

二人は落ち着かないまま、とにかく休み、食した。

幸いその日に兵士は来なかった。

国全体が田舎なので、情報が伝わるのは遅い。

それに逃がした兵士はいなかったからだろう。

そして翌日――

「・・・じゃあ」

「本当に、本当に、気を付けるんだよ！」

「・・・はい」

クリフはもう、決心していた。

このままゾーンと一緒にゴウの元へと乗り込み、ゴウを裁き、国に自由をもたらす。

「ま、俺が付いてるから大丈夫だよ！任せてくれおばさん」

そしてゾーンは、かなりの自信をつけていた。

そしてそれに伴い、かなりの実力をもつけていた。

クリフは言った。

「まずは仲間が必要だ。昨日の人のいった、この『刃』を無駄にしない為に」

「んー、俺は突っ込む以外は苦手だからな。仕切るのはお前に任せた！」

そして二人はまず、若者が沢山いる地域へと向かった。

「みんな、今こそ立ち上がる時だ！」

クリフは生れて初めてというくらいに、大きく叫んだ。
若者たちは二人を見た。

「あれ、まさか噂の反乱軍じゃ・・・」

「二人！？兵士をもう百人近く倒してるって聞いたが」

「しかもあんな・・・俺達と大して変わらない年齢だなんて」
兵士達も、当然こちらを見る。

「貴様ら！」

そしてまた、十数の兵士がやって来る。

クリフは左腰の剣を抜いた。

「我が名はクリフ！暴虐の限りを尽くすゴウの下僕よ、覚悟！」

そして駆け出し、兵士を斬ってゆく。

毎日農業で鍛えられた腕は、この剣ならば自在に扱えた。

「あれま、急にかっこつけちゃって」

ゾーンもまた、構えた。

「俺も良い所みせるぜっ！」

そしてゾーンは更に強かった。

「オリヤ！」

兵達が構える間も喋る間も無く、バツバツと倒していく。

「すっ、すげえ・・・」

それを見ていた若者達は、思った。

「でも、俺達にももしかしたら・・・」

兵を全員倒し終わり、クリフは再び叫んだ。

「さあ、共にゴウを討とう！」

若者達も、決心した。

「おおーっ！」

こうしてクリフとゾーンは、一日で多くの仲間を得た。

若者達は噂を流し、国の中央にいる者たちはどんどんと集まった。クリフの軍は百人ほどになり、翌日、遂にゴウの館へと向かう事となる。

ゴウの館の周りには、兵が数百人。

しかしこれまでもう、二人で百人を相手としてきたクリフとゾーンは、怖気づく事は無かった。

「行くぞ！」

「おうっ！」

「おおーっ！」

そしてクリフの軍は、館へと突入した！

「外が騒がしいな」

「はっ、反乱軍が侵入した模様！」

「何！？数は！？」

「ひゃ、百名ほどです！」

「この国で百人も反乱する奴がいたか・・・フィン」

ゴウは兵を下がらせ、隣の部屋の側近・剣豪であるシンを呼んだ。

「シン！」

「・・・は」

「反乱軍だ。お前の腕、見せてみよ」

「承知」

白と黒の着物、大刀と小刀を左腰に差した男・シンは、素早くゴウの部屋を出た。

「・・・フィン！」

紺色の着物、黒い髪を逆立て、虎髭を生やした男・ゴウは、立ち上がり笑みを浮かべた。

「面白いわ！まさかワシの館に乗り込んで来る者が現れたとはな！」

「うつ、うおーっ！」

「ぎゃああっ」

「うわあっ」

クリフの軍は、奮闘していた。

ゴウの軍勢と、一進一退の攻防を繰り返していたのだ。

「ここはこいつらに任せて突っ込もうぜ、クリフ！」

「ああ・・・早く総大将を倒して、戦いを終わらせた方が被害が少ないだろう」

クリフとゾーンは、兵を斬り倒しつつ奥へと向かう。

そこに、右手に大刀左手に小刀を持った、黒髪・髭の若者が立つ。

「拙者の名はシン。ゴウ様に仇なすもの、我が剣で斬る」

「こいつは強そうだな・・・」

クリフもゾーンも、同じ事を思っていた。

「クリフ・・・こいつの相手は俺がする、行けっ！」

「わかった！」

そしてクリフはゴウの元へと向かい、ゾーンと剣豪・シンの戦いが始まった。

「覚悟！」

シンは大きく飛び上がり、刃を素早く交差させる。

「うおっ！」

ゾーンは槍を縦にして防ぎ、押し返す。

「やるな！」

「貴殿も」

その後何度も、刃と刃は激しくぶつかり合った。

ゾーンは生き生きしていた。

今までずっと、退屈で不満な暮らしをしてきたが・・・俺は今、生きてる。

シンもまた、生き生きしていた。

彼もまたゴウの元、裕福ではあるが退屈な暮らしをしてきた。

「剣豪」と称されはしたが、今まで戦ったのは数人の反乱者と、他の国の剣客のみ。

少年の頃、その全てを無傷で倒した為、彼は剣豪と呼ばれた。

「・・・はっ！」

クリフは兵を倒し続け、最後の襖を開けた。

剣を持ったのは昨日が初めてで、ここまで無傷で来た彼は・・・やはり特別な人間だった。

「来たか」

虎髭の男は、大きな刀を持っていた。

「お前がゴウ・・・だな。お前を倒し、この国を開放する！」

「ただの農民の分際で、好き勝手しおって！やってみろ小僧！」
そしてクリフとゴウの戦いも始まった。

「はっ！」

「オラアッ！」

シンとゾーンの戦いの激しさは、衰えなかった。

「さすが剣豪・・・だな」

「貴殿こそ・・・農民が、拙者と対等に渡り合うとは驚いた」

「なあ・・・あんた何でそんなに強いのに、ゴウなんかに従ってるんだ？」

「・・・ゴウ様は、刀と共に捨てられた拙者を育ててくれた」

「・・・なるほどな。でもよ、恩人の間違いを黙って見てるのは、

良い事だとは思わねーがなっ！」

ゾーンは突進した。

「クッ！」

シンは両の刃で受け止めたが、ゾーンの渾身の一撃に押され、弾かれた。

「うおおーっ！」

そしてゾーンの槍の切っ先は、シンの喉下で止まった。

「・・・何故」

「今からでも、遅くはない。今頃きつと、英雄が誕生してるさ。一緒に
緒に行つて、やり直そうぜ」

ゾーンは剣豪に、手を差しのべた。

「フ・・・甘い御仁だ」

そしてシンは立ち上がり、槍使いと共に、奥へと向かった。

「確かにゴウ様が、正しい事をしているとは思えぬ・・・」

兵とクリフ軍の戦いも、少しずつ收拾されてきていた。

「死ねい！」

ゴウの刃は、クリフの頬を切った。

「くっ！」

さすがにすごいプレッシャーを感じるクリフ。

この男・ゴウは自身も強く、更に頭も使う。

ただの盗賊が、もう何年もこの町を支配している。

捨て子だったシンを見込み、育て、側近とする。

殺さぬ程度に農民を脅し、力ある者は取り立てて兵とする。

彼は彼なりに努力をして、この地位を得た。

「貴様ごときに、この国はやらん！」

ゴウの刃には、必死さがあつた。

「私が欲しいのは国ではない、民の自由だ！」
だがクリフの刃の真剣さは、その数倍だった。

大将同士の決着は、案外すぐに着いた。

「ぐっ……」

クリフの刃は、ゴウの胴を横切り……裂いた。

「馬鹿な……」

ゴウは力も頭も備えてはいたが、心が無かった。

己の欲ばかり満たし、兵は揃えても自身の修行を怠り、そして今また油断した。

「……やった……」

農民クリフは、多くの味方達と共に今、国を取り戻した！

「やったなクリフ！」

「ああ」

「……見事」

クリフ、ゾーン、シン。

そして若者達と、改心した兵達は集った。

「豊かな地『エターニア』は、今日からまた始まるんだ」

「おうっ！頑張ろうぜ」

「拙者も先の無礼を詫びる為、協力させて頂きたい」

「おおーっ！」

そして正義の心と共に、国はこれから復興してゆく。
今はできたばかりの、小さな国ではあるが。

こうして、エターニアは始まった。

クリフ、ゾーン、シンという三人の若者を中心に。

#3

二人と一匹の旅の続き。

剣士ジン、棒術使いケビン、山犬ランディ。

彼らは村々を渡り歩き、盗賊や悪党を倒しては、また次の地へと向かっていった。

大陸の西では小さな国・エターニアが生まれていた頃、ジン達もまた西に来ていた。

「なあジン」

いつものように、酒場でケビンとジンは休息している。

「何？」

ケビンはミルクを飲みながら、ジンに問いかけた。

ランディは店の外でお留守番、である。

「ジンはどうして旅に出たんだ？故郷は？」

「・・・そう言えば、何も話していなかったな」

ジンは紅茶を飲みながら、言った。

「お前ってこっちが話しかけると結構面白い事言っけど、自分からは何も話してくんないもんなー。結構冷たい奴だとカン違いされるんじゃないか？」

「・・・。」

鋭いな、とジンは思った。

まあ他人と関わる事がほとんど無いのだから、今までは誰にどう思われても良いと開き直っていた（？）のだが、ジンにとって、ケビンは違った。

嫌われたくない仲間だった。

「おっと話がそれてた！ジン、良かったらお前の過去を聞かせてくれよ。俺の過去なんて村で畑耕すばかりで、つまんねー話だったけどよ」

「平和が一番だよ」

ケビンの昔の話は、既に聞いていた。

本人の言う通り、父と母と村人と、ただ普通に晴耕雨読の生活をしてきた。

ただそれが、ジンには羨ましかった。

「・・・あまり話すのって、得意じゃないんだけど」

ジンは少し緊張しながら、話し始めた。

十数年前――

町を、大火が襲った。

これはジンの、最も古い記憶だった。

名も記憶に無い父と母の下、兄弟がいなかった事もあり、彼は大変可愛がられて育った。

だがその幸せも、ジンが物心つく頃には崩れ去ったのだった。

あの忌々しい、大火の日によって。

「逃げろ！ジンを連れて！」

父の最後の声が、耳に残っている。

その後父は剣を持ち、大火を放つ者の下へと向かって走っていった。

ジンは母に連れられ、走った。

ただただずっと、走った。

やがて大火は町全体を覆い尽くし、母は遂に果てた。

「ジン、生き延びて・・・」

母の言葉を胸に、ジンは走った。

ただ幼いジンも、すぐに力尽きた。

ジンは父、母、生まれ育った町と共に、果てようとしていた。しかし運命は、彼を生かした。

燃え盛る炎の中に素早く飛び込み、ジンを抱えて走る男。

まだ若いその男は、今のジンと同じ賞金稼ぎだった。

二本の剣を持ち、襲いくる炎を薙ぎ払い、遂にはジンを助け出したその男。

名を、ダガードといった。

「あ、あ・・・」

元々の内気な性格と、恐怖で口のきけないジンの頭を、ダガードはなでた。

「無事か」

「あ、あ・・・」

「無理に喋る必要は無い。どこか傷むなら教えろ」

「いや・・・」

ジンは首を、横に振った。

「お前は運が良い。私に見付からなければ、今頃あの炎の中だ」

町から随分と離れた所まで来たが、ここからでも町の大火はよく見えた。

子供を抱えながら二本の剣を扱い、獣のような速さでここまで来たこの男。

ダガードが、幼いジンには神のように見えた。

「いや・・・すまん」

「？」

「あの炎の中には、おそらくお前の両親も・・・『運が良い』などと言って、すまん」

ジンは声もあげず、涙を流した。

故郷と両親を失った悲しみと、強く優しいこの男に出会えた喜びで静かに泣き続けるジンを、ダガードは放っておけなかった。

纏っていた布をジンに与え、彼はその子連れて歩き始めた。

これがジンの生涯の恩人にして剣の師・ダガードとの運命の出会いだった。

ダガードは、身寄りの無い子供・ジン連れて、旅を始めた。
一時も離れる事無く、二人は行動していた。

「よく見ているのだ、ジン」

時にはジンを護りながら、賞金首や獰猛な獣などとも戦うダガード。
彼は己の剣技の全てを、ジンに伝承した。

ジンの父も剣士であった為か、ジンはすぐに上達した。
修行をしながらの旅。

十年ほどのその旅で、ジンは立派な少年剣士へと成長した。
幼い頃にダガードに買い与えられた大きな銀の剣は、その頃にはもう丁度良い大きさになっていた。

そしてある時――

「ジン、この砂漠の向こうから、盗賊団が来るのがわかるか？」

「いえ・・・何も見えません」

「人間の視力には限界がある。見るのではなく、感じるのだ」

「・・・」

「難しいか。まあ良い。ジン、お前一人で奴らを倒してみろ」

「はい」

ジンは砂漠の向こうへと走り始めた。

「ん？おい、何か来るぞ」

「ガキだぜ！」

確かに砂漠の向こうには、盗賊たちがいた。

「ガキ一人でこんな所まで来れる訳ねえ！とっ捕まえて、連れて来た奴を脅すんだ！」

「へい！」

盗賊たちは、走り来るジンを囲み始めた。

が、囲んでしまう前に、ジンは既に盗賊の目の前に来ていた。

「！？こいつ、早え！」

ジンはその頃既に、少年とは思えない俊足を持っていた。

目の前の盗賊と、後ろに來た盗賊は、それぞれ武器を振り上げる。

ジンが素早くそれらを避けると、武器はそれぞれ対面の盗賊を切り裂いた。

「ギャアアッ！」

「（奴らは手を出した・・・もう良いですね、ダガードさん）」

ジンは剣を抜き、次々に襲い來る盗賊たちを斬っていった。

勿論全員の急所はしっかりと外されていたのだから、流石だった。

「・・・フウ」

十数人の盗賊たちを一人で倒し、安心したジン。

だが足元には、その隙を狙う盗賊がいた。

「ギャアッ！」

そしてそこにダガードが現れ、盗賊を斬りつけた。

「ジン」

「ダガード様！」

「油断するな。どんなに強くとも油断すれば負ける」

「はい・・・申し訳無い」

「・・・だがこれだけの数をやるとは。さすがだ」

「ダガード様のおかげです」

「これだけの強さがあれば、もう師は傍に必要無かろう」

「・・・え？」

「最後の修行だ。かかって来い」

「！？」

ダガードは、二本の剣を抜いた。

「来い」

「ダガード様・・・わかりました」

ジンも、剣を構えた。

「俺の力を見てください」

ダガードは頷いた。

ジンは素早く駆け寄り、本気で斬りかかった。

力を抜く事は、最高の師に対する無礼だと思つての事だった。

「よし」

だがダガードは軽々と片手でそれを止め、もう片方の剣でジンを攻めた。

「ハッ！」

ジンは素早くしゃがみ、次の攻撃に出た。

「・・・！」

ダガードは素早く両手の剣を広げ、ジンの剣を遠くに弾き飛ばしてしまつた。

「あ・・・」

「・・・」

「参りました」

ジンのダガードへの尊敬は、また一つ深まつた。

「見事」

ダガードは飛ばした剣を広い、ジンに与えた。

「お前ほど強い剣士は、そうはいるまい」

「ありがとうございます」

「これからは一人で旅をしる。そしてもう一度会う時は、私を越えてみせろ」

「ダガード様・・・」

「いいな」

「・・・はい」

こうして別れは、突然にやつて来た。

「ここからはお前の道だ。とにかく・・・生きる」

それだけ言い残して、ダガードは早々に去つて行つた。

「・・・はい、ダガード様。今まで本当にありがとうございました」

ジンは涙を流しながら、ダガードの姿が見えなくなるまで、ずっと深々と頭を下げていた。

「・・・」

そして内気な少年は、瞳の奥に強い心を持った。
ジンの一人旅は、こうして始まった。
数年前の事だった。

そして、現在――

「・・・ふーん」

「まあ、覚えてるのはこんな感じかな」

「やっぱドラマティックな過去持ってたんだな、オマエは！」

「確かに『普通』じゃないかもしれない」

「苦労したんだな」

ジンはケビンを見て微笑んでいた。

「じゃあさー、お前の旅って故郷を潰した奴への復讐？ダガードって人を越える為の修行？とか？」

「復讐なんて考えてはないけど、そうなるかもしれない」

「そうか！俺とお前は、正義の味方だもん！世界各地の悪を倒していけば、いつか仇に辿り着くかも！」

「正義の味方は、少し大げさな気がするけどな」

「そんで、そのネックレスは・・・？いや、話したくなければ」

「ああ、これは」

ジンはまた、哀しい眼をした。

「好きな人を一人、守れなかった」

「あ・・・」

ケビンはジンの哀しい眼を見て、困った顔をした。

一年前――

ジンは立ち寄った町で、ノラ猫と戯れていた。

「動物、好きなの？」

「！」

いきなり後ろから少女に話しかけられて、ジンは驚いた。

銀のネックレスをつけた少女は、自分よりも少し年下のようで、とても美しかった。

「私はアリサ。あなたは？」

「・・・ジン」

二人はすぐに、仲良くなった。

「ジンはいろんな所を旅してきたのね！」

「・・・まあ、ほとんど砂漠とか山とか森とか、だけど」

「いいなあ。私勉強もできないし、ずっとこの町にいるし、何も知らないの」

明るい性格のアリサは、ケビンと同じようにジンに次々と話しかけ、打ち解けた。

この町・ドラは、戦地のすぐ傍だった。

東の軍事大国・ギガントの軍が、すぐ近くまで来ている。

もうすぐ戦火になるかもしれないこの町でも、人々は明るく生きていた。

「私にはお兄さんがいるんだけどね、徴兵されてるの」

「・・・。」

「でもいつかきつと、元気で帰って来てくれるよね」

「・・・ああ」

ジンはその時初めて、嘘でも根拠の無い言葉でも、何か言いたかった。

明らかに、アリサに惹かれていた。

だがその束の間の幸せすら、長くは続かなかった。

町中が恐れていた事が起こった。

ギガント軍はもう、そこまで迫っていた。

町が、ざわめき始めた。

ジンの脳裏には、十数年前の大火が過った。

「・・・アリサ」

「みんな、他の町に避難を始めたわ」

「アリサも」

「ダメよ！私は・・・ここで、お兄ちゃんを待ってるのよ」

「アリサ・・・」

ジンは思った。

自分が、この少女を守ってやろうと。

かつて自分を救ったダガードのように、自分がアリサを救おうと。

数日後――

ジンは己の無力さを、実感する事になる。

町は完全に渦中にあつた。

あの時と同じ・・・大火が町を襲う。

あの時と違うのは、兵士がいた事だった。

町の生き残りを、次々に殺し始めた。

「アリサ！」

ジンは叫び、走った。

兵士を次々に斬り、走った。

「ジン！」

「アリサ！」

そして見付けたアリサの上から、炎に包まれた建物が崩れて来ていた。

「！」

ジンは必死にアリサをかばおうとしたが、遅かった。

「アリサーッ！」

「ジン・・・やっぱり私バカだったね」

「喋るな！今助けて――」

今ジンの背中にも翼のように大きな傷ができたが、そんな痛みはど
うでも良かった。

ただ目の前で燃える建物に押し潰される少女を助けたかった。

「生きてね」

アリサは素早くジンにキスして、ネックレスを渡した。

「おい、そこに誰がいるぞ」

「殺せ！」

何十という兵士たちが、近付いて来る。

この疲れ、傷、敵の数・・・ジンはもう、諦めようとしていた。

「アリサ・・・俺も一緒に、逝くよ」

建物は、完全に崩れた。

だが最後の瞬間、アリサはジンを突き出した。

ジンはまたも、助けられた。

助けるどころか、少女に助けられてしまった。

ジンは悲しみと情けなさで涙が出そうになったが、そんな余裕は無かった。

ダガードと、アリサとの約束を守る。

燃えるように熱いネックレスを持って、大きく重い傷を負って、ジンは走った。

そして彼は、約束を果たした。

生きて、今に至る。

「・・・」

「悪い、聞いちゃってさ」

「いや、誰かに話したかったのかもしれない」

「・・・東の大国・ギガントか。手強い相手だな」

「武力で世界を支配しようとしてるらしい。今は敵わないが、いつかは・・・」

「ああ！ビッグになって、一緒にぶっ潰してやるーぜ！もしかしたらジンの故郷を潰したのも、ギガントかもしれないえ！」

「とにかくもつと力をつけないと」

元々剣技の素質あるジンが、油断を無くし、更に様々な経験と思いから、修行を怠らないのである。

努力を惜しまぬ天才が、強いのは当然の事だった。

「俺ももつと頑張るぜ！そんで仲間も増やして金も稼いで、とにかくビッグになるぜ！」

ケ빈は決して悪人ではないが、何を考えているのかよくわからない所もあった。

力も一般人より少し強いほど、頭は一般人よりかなり弱いほどだったが、彼は確かにジンの心を開いた。

ダガードとアリサを除けば、唯一人の人間だった。

「ちよいとそこのお二人さんよ」

そこに、銃を持った男が近付いて来た。

「そっちの赤い服の少年がでけえ声で話してるもんで、聞こえちまったんだがな」

男はジンの隣に座った。

「少年って・・・あんたもそう変わらねーように見えるけど！」

「そうかい。とにかく、俺はバルトってんだ」

バルトと名乗ったその男は、紺色の目立たない服に、軽量の鎧のようなものを着けていた。

「あんたらの話によると、ギガントと戦いたいみたいじゃないか」

「まあな！でも二人で挑んでも、潰されるだけだろ」

「俺もあんたらの仲間になろう」

「いや三人で挑んでも、潰されるだけだろ」

ジンは言った。

「ケ빈。少し、話を聞こう」

「・・・わかったよ」

ケ빈が黙って、話しやすくなったバルトは語り始めた。

東の大国ギガントは、数年前から着々とその勢力を拡大している。

遂にその勢力は、西にまで攻め入ろうとしていた。

そこで西の人々は立ち上がり、まずギガントの先鋒隊に対抗する事

にした。

西の賞金稼ぎ・アークは自ら総大将となり、義勇軍を募った。そして同じ賞金稼ぎで、何度か共に行動したバルトも、義勇軍を集めている所だった。

「・・・なるほど」

ケビンは眼を輝かせた。

ジンの心も、晴れていた。

「立ち上がる人、集う人がいるんだな」

バルトは言った。

「ああ。アークはまさに、あんたらの言う正義の味方ってやつさ」
ケビンも言った。

「俺の声、そんなに丸聞こえだったんだな・・・とにかく！この世の中、まだまだ捨てたもんじゃねーな！」

「って事だ。どうお二人さん、義勇軍に入ってみねえか？」

「もちろん！なあジン！」

「ああ。でも」

「何だよ？」

ケビンはジンが何を言いたいかわからず問いかけたが、バルトがその答えを与えた。

「言いたい事はわかるぜ。約一名、弱っちい奴がいるんだ。このまま戦場なんかに出たら、死ぬぜ」

「・・・」

「その弱っちいって・・・俺！？」

「しかいねえだろ」

「・・・」

ごまかすように、ジンが聞いた。

「バルトは見ただけで、人の強さがわかるのか？」

「随分昔から戦いまくって来たからな。賞金稼ぎというよりは、俺は傭兵だな」

バルトは何年も前から、戦場を転々としてきたらしい。
「コイツの腕にも、自信はあるぜ」

バルトは、散弾銃を持っていた。

この世界の「銃」は、人の命を絶つほどの威力は無い。
切りつけるのと、同じくらいのものだった。

銃には主に空気銃、散弾銃、レーザーガンなどがあった。

空気銃は空気弾を撃ち出し、散弾銃は専用の石玉を使い、レーザーガンは攻撃性の光を放つ。

「ギガントは軍事大国ではあるが、所詮人の集まりよ。強い兵士と戦車、それだけだ」

ギガントの持つ「戦車」とは、炎や火の玉を吐き出す兵器である。

「とにかく・・・まずはもつと修行しよう」

「アークのいる街に行くまでに、たっぷり時間はあるさ。鍛えてやるぜ少年」

「なんだよう・・・強くなってやるからな！」

「ワンワン！」

そして二人と一匹に、傭兵・バルトという仲間が加わった。

三人と一匹は、再び旅路につく。

ジンはネックレスを、固く握り締めた。

ケ빈は今までと比べ物にならないほど、熱心に鍛えた。

バルトは銃の手入れをかかさなかった。

ランディは、ずっと付いて来ていた。

「・・・って、おい！」

「ん？」

「どうしたバルト」

「この犬、いつまで付いて来させんだよ？」

ジンは微笑み、返した。

「利口な犬だから、大丈夫だよ」

「そうそう!」

「・・・。」

とにかく三人は、それぞれの想いを胸に、更に西へ向かった。
道中力を蓄え、勇者・アークの下へと歩き続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3277g/>

Cross

2010年12月11日22時47分発行